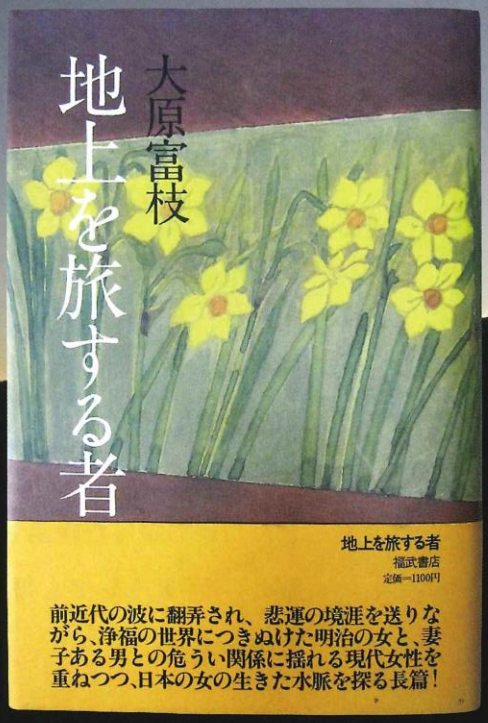
地上を旅する者
～負の世界に生きる～

勝つ人間は絶対に書きたくない。
負の世界に生きる人間だけを
描いてゆこうと決心している。
負の世界にこそ人生
というものはあって、
文学もそこにある。

「ほととぎすの朝茶事」
(「淡交」1985年)

1979年自宅庭にて



1983年福武書店　装丁:朝倉摂

令和3年
8月1日(日)
≫
11月28日(日)

大原富枝文学館

開館時間　午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日　月曜日(祝・祭日の場合は翌日火曜日)

入場料　一般・大学生　300円(240円)
小・中・高校生　100円(80円) ※(　)内は、団体20名以上料金

■身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者、高知県又は高知市長寿手帳をお持ちの方は入館料が免除となります。窓口にお問い合わせください。

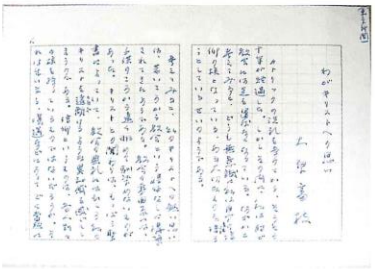
主催:本山町立大原富枝文学館、本山町教育委員会、本山町

高知県、(公財)高知県文化財団、高知県教育委員会、(公財)高知県観光コンベンション協会、高知新聞社、ＲＫＣ高知放送、朝日新聞高知総局、毎日新聞高知支局、(株)読売新聞高知支局、ＮＨＫ高知放送局、ＫＵＴＶテレビ高知、高知さんさんテレビ(株)、ＫＣＢ高知ケーブルテレビ(株)、本山町観光協会(順不同)

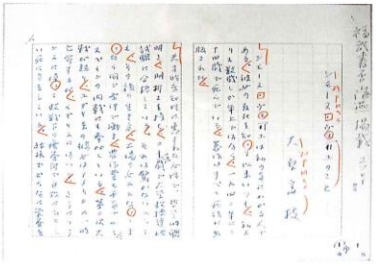
地上を旅する者

～負の世界に生きる～

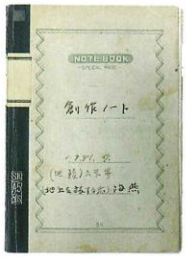
開館30周年の節目にあたり、大原文学の思想的到達点である長編小説『地上を旅する者』(福武書店1983年)をとりあげ、カトリック入信を経て、大原富枝がたどりついた文学的主題「現代における弱者の生き方」を掘り下げ、作品の魅力に迫ります。本作は、前近代の波に翻弄され、悲運の境遇を生きた明治の女、番場かめの生涯を、その孫のジャーナリスト浦賀利江の視点で描き出したものです。祖母かめを中心に、長女よしの、孫利江と、女の置かれていた明治、大正、昭和の三代の生き方と思想が、同心円を描くように描き出されてゆきます。そこには、戦前から戦後、現代へという時代の変わり目のはざまを生き、女性の生き方の多様さが許されるようになる過程を眺めてきた大原自身の姿が投影されています。純粋であるがゆえに、不合理な現実に痛めつけられる主人公番場かめは、大原自身が「自分の作品の中で最も切なく愛し続けている女」であり、その他の作品のなかにも、大きく影響を与えているといいます。「信仰」「負の世界」「弱者」などについて綴った作品とともに、館蔵資料を読み解きながら、大原のいう「どうしても書いておきたかった私の人生の重い主題」を探ります。



1987年「わがキリストへの思い」原稿



1988年「シモーヌ・ヴェーユのこと」原稿



創作ノート

1930年　詩歌集

1967年『神を待ちのぞむ』
勁草書房

企画展関連事業

第8回 大原文学ミニ講座

本山町プラチナセンター

令和3年 9月26日(日曜)

朗詠 「悲しみは･･･」ほか
秀風流日本吟詠会二代家元　野中秀宗氏

朗読 『地上を旅する者』
高知県立嶺北高等学校生

講演 「大原富枝全集 編集の思い出」
大阪芸術大学教授　福江泰太氏

定期朗読会

9月12日(日曜)　10月10日(日曜)　11月14日(日曜)

大原富枝文学散歩

11月23日(火曜)